

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第34回：第4章-その6-

## 障害児支援の最前線で働き続ける理由

著：小幡知史

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

前回は毛利甚八作、魚戸おさむ画の「家栽の人」という作品を挙げ、この作品によって私が「答えがないという答え」という発想を得たことを紹介した（対人援助マガジン第61号を参照）。前回の原稿を執筆後、再び自分の人生を振り返って、自身の対人援助に大きな影響を及ぼした漫画について振り返ってみた。

対人援助にも通底する自身の人生観、哲学の形成や職業選択に影響を及ぼした作品は枚挙にいとまがないが、今回は「自分がなぜ障害児支援の現場で働き続けているのか」という、現在進行形で活き続けている自身の対人援助観を形成した一つを紹介したい。

その作品は、佐藤秀峰の「ブラックジャックによろしく」である。本作品はドラマ化もされているので、知っている方も多いのではないだろうか。本作品は研修医である主人公の目線から、医療制度の現実や矛盾、患者を取り巻く環境や心理的葛藤をつぶさに生々しく、グロテスクなほど情緒的に描いていたように記憶している。

すべてのエピソードにおいて、多くの対人援助職者の価値観や倫理観を揺さぶるテーマや言葉に満ちているが、私の頭にこびりついているエピソードは、「小児科編」である。本エピソードの舞台はタイトル通り小児科で、緊急時の対応や夜間など時間外診療の多さ、それらに伴う小児科医の過酷な労働環境がさまざまと描写されている。主人公だけでなく読者すら、どうにもならない、どうしようもない現状を痛感してしまう。そんな怒涛の小児科での研修期間を終え、主人公は指導に当たっていた小児科医に「小児科医を続ける理由はなんですか？」と問いかける。その小児科医はそれまでの柔軟な表情から一変し、覚悟すら読み取れるような顔で、「僕がやらなきゃ、誰がやるんですか？」と答える。この場面では、その言葉の真意や背景にある文脈などは詳しく描写されてはいない。しかし、本エピソード全体を俯瞰することで、その言葉に込められた意味合いが見えてくる。

私は障害児支援の現場で、管理者かつ児童発達支援管理責任者として、日々働いている。合わせて、実践における研究活動も細々と続け、ポスター発表ではあるが年数回、学

会などで登壇もしている。また一方、地元の専門学校で看護師やST（言語聴覚士）、PT（理学療法士）などのリハ職を目指す学生に、心理学など多岐にわたる対人援助に関する内容を講師として教えたりもしている。

自分から言うのは憚られるが、現場以外にも、研究や教育のフィールドにシフトすることも可能だし、おそらくそちらの方が自身の金銭的・時間的環境は良くなりそうである。何より、肉体的な負担は明らかに現場の方が重いであろう。実際、現場で一定の経験を積んで、研究や教育のフィールドに羽ばたく方は少なくないという印象がある。

少なくとも私に限った話ではあるが、仕事に関して多様かつインセンティブのある選択肢がある中で、自身が現場をメインに働き続ける大きな理由は、上述の「僕がやらなきゃ、誰がやるんですか？」である。私の肌感覚が大きいところで、具体的なエビデンスもない意見ではあるが、障害福祉の現場では専門的な知識を十分に持ち、かつ、きちんと研究活動も展開する「サイエンティスト・プラクティショナー」は少数派であるようと思う。理由は様々であるが、「優秀な人ほど早く辞める」という側面は決して少くないだろう。専門的な知識が十分にあるとはいはず、かつ研究活動にも全く興味がない支援者が多数の環境では、また、別立てで書けるほど様々な思いが逡巡する。

それでも、私が誰かに「どうして現場に居続けるのか？」と聞かれたら、私はおそらく上述の言葉を返すだろう。「僕がやらなきゃ、誰がやるんですか？」

この言葉には、自己憐憫のようなヒロイズム的動機が内在しているかもしれないし、單なるこだわりかもしれない。ゆえに、年に数回は自分自身に「なぜ現場に居続けるのか？」と問いかける。その度に上述の言葉を思い出し、思い悩む。ある意味で、本作品が自身の対人援助実践をリブートするきっかけでもあり、そしてリブート“しない”きっかけでもある。

一つづく一